



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## 兵庫県環境体験事業における「明石のはらくらぶ・環境体験学習サポートセンター」の取り組み

著者	丸谷 聡子
雑誌名	同志社政策科学研究
巻	11
号	2
ページ	191-194
発行年	2009-12-20
権利	同志社大学大学院総合政策科学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012634">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012634</a>

## 兵庫県環境体験事業における 「明石のはらくらぶ・環境体験学習サポートセンター」の取り組み

丸谷 聡子

(博士前期課程 2009年度生)

### 1. はじめに

兵庫県は、2006年3月に制定された『兵庫県環境学習環境教育基本方針』に基づき、その推進を目的に『ひょうご環境学校事業プログラム』を策定し、県下全公立小学校の3年生を対象に環境体験事業を実施している。すでに2007年度から段階的に推進校を増やし、2009年度より810校（4分校を含む）の全公立小学校で取り組みが始まっている。

筆者は自らが代表を務める「明石のはらくらぶ」の活動の一つとして、2009年3月に「環境体験学習サポートセンター」を立ち上げ、2009年9月現在、明石市内28小学校中9校で環境体験学習におけるコーディネート、サポートを行っている。本稿では、この5ヶ月余りの活動で積み上げられた小さなイノベーションの中から特にサポートの入り口部分である学校、担当教員とのやり取りに焦点を当てて報告する。

### 2. 「明石のはらくらぶ」設立の背景

筆者は、小学3年生から参加した「ひょうご自然教室」での原体験が人間形成の基礎となり、高校生の頃から自然と人の共生を考える活動を続けてきた。現在は、子育てをしながら身近な自然を通してその素晴らしさや生命の大切さを子どもたちに伝えていきたいと、東播磨地域で活動している。その中でも、10年前から外部講師として連携授業を担当してきた明石市内の一小学校での経験が基礎となり、さらに活動を充実させるため、2004年、「明石のはらくらぶ」を

設立した。環境体験学習が人と自然が共生する社会実現に向けて市民意識の醸成の糸口になるのではないかと考え、賛同者の協力を得ながら、環境体験学習のサポート、親子観察会、教材作り、図書の出版（『明石の野鳥』<sup>1</sup>）等を行い、幼少期から継続した自然体験や環境学習導入の重要性を提案してきた。

このたび、兵庫県で環境体験事業が実施されるにあたり、2007年度は、明石市内6推進校のうち3校、2008年度は17推進校のうち5校から協力依頼があり、指導者・コーディネーター等として関わってきた。現在の主な活動は、筆者が大切と考えている「環境体験学習の第一歩は、身近な自然の存在に気づくこと、そして興味・関心を育て、自分が住んでいる地域を大切に思う心（郷土愛）を育てること」を基本とし、それぞれの校区内にある里山・ため池・河川・田園地帯・海等からフィールドを選定し、年間を通したプログラム作成のアドバイス、さらには、必要に応じて専門家、行政、公共施設、地域住民、PTA等の関係者をつないでいる。

### 3. 環境体験学習の現状

現在、活動の拠点としている明石市では、自然に対する畏敬の念をはじめ、命の大切さ、命のつながりを肌で感じながら、人間形成の重要な時期に、自然の美しさに感動する心を育み、自然の中で命のつながりを学ぶことを目的とし「みる“め”、みえる“め”、みつめる“め”命をみつめ、社会をみつめ、つながる心をはぐくむ」をテーマに環境体験事業を推進している。しか

<sup>1</sup> 丸谷聡・丸谷聡子共著『明石の野鳥』（明石市文化博物館、2006年）



図1 2009年7月15日 A小学校で自然のつながりについて話をする筆者

し、本年度新規実施のいくつかの小学校では、まだ十分なサポート体制が整っておらず、担当教員の負担が大きくなっている。また、環境関係の公共施設もただ受け入れるだけに終わっているのが現状である。

そこで「どうしてよいかわからない。」「助けてほしい。」「大変だ。」等の現場の声に応えるため、豊富な経験をもった学外のコーディネーターがアドバイスやサポートを行い、専門家、行政、地域の関係者とつなぐことで、子どもたちにより充実した環境体験学習の機会を提供できるのではと考えた。そのためには、まず校区の自然環境を調査・把握し、担当教員の思いをじっくり聞いた上で、一年を通して地域の環境を十分生かせるテーマを見つけ、プログラムを組み立てることが必要になってくる。それは、担当教員と共にフィールドを歩き、自然の神秘や不思議に触れ、多くの発見や感動を体感することから始まる。それらの体験を共有し、教員自らが楽しんでテーマやプログラムを考えることで、自然にその学校ならではの独自性のある活動へと発展していく。このことは、筆者にとっても大きな驚きだった。それらを象徴する事例として今年度新規に対応した4校の取り組みを紹介し、特に担当教員の意識や意欲、行動の変化に重点をおいて、そこで芽生えた小さなイノベー

ションを報告する。

### 3.1 A小学校（大規模校）の事例

「都市公園で樹木の観察をしたいが、児童数も多く、どうしたらよいかわからない」と相談があった。

まず、休日を利用して、担当教員とフィールドを歩き、約140名が同時に観察できる場所を探した。数か所の候補地の中から、広場の周囲に樹木が茂る見通しのよい場所を選び、学校側の希望どおり一年を通して子どもたちが選んだ「マイツリー」を観察することにした。担当教員が事前の下見において木にも色々な生きものが関わっていることを体感したことで、樹木の観察だけでなく、そこから興味を持った生きものについても関心を深め、自然の中の循環や生命のつながりを考える広がりのあるプログラムへと発展していった。

また、打ち合わせを重ねる中で、信頼関係もできてきた。筆者が、負担が大きく大変なことを労うと「丸谷さんがいるから大丈夫。」と笑顔で返してくれた。先生の負担を少しでも軽くしたいという筆者の思いが形になったと感じられる瞬間だった。

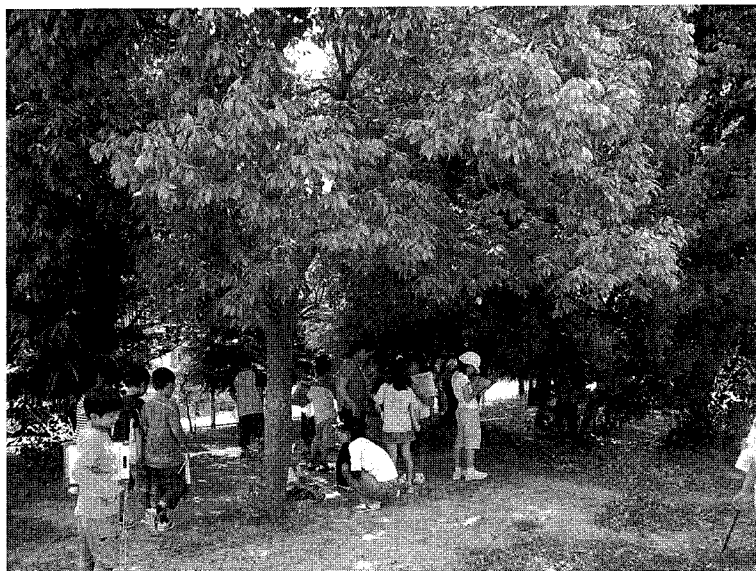


図2 2009年7月6日 C小学校、校庭の小さな森で自然を感じる子どもたち

### 3.2 B小学校（海辺）の事例

「学校の前に海があるが、何も生きものがいない。どうしたらよいか？」との相談があった。

近くの海岸で実施された海の生きもの観察会に参加した担当教員は「ここは色々な生きものが観察できていいですね。」とため息をついていた。観察会終了後、筆者と校区内の海に行ってみると、海藻十数種類、貝十種類、魚の稚魚、カニ、アマモ場と先程の観察会以上にたくさんの生きものが観察できた。担当教員からは「一人で来た時は何もなかったのに、こんなに色々な生きものがいたんですね。なんだか楽しくなってきました。」「子どもたちにもこんな素晴らしい海だということを早く教えてあげたい。」と目を輝かせ話してくれた。それまでは、どうしたらよいかずいぶん悩んでいたそうだが、フィールドをコーディネーターと歩いただけで問題が解決し、あっという間に「海での観察を通して、自分たちの地域を見直そう。」「アマモの里親になろう。」「次の学年へバトンタッチしていこう。」という段階的なつながりと物語のあるプログラムが出来上がった。

### 3.3 C小学校（校庭活用）の事例

「校区内に自然観察できる場所がない。どうしたらよいか？」との相談があった。

実際、校区内を歩いてみたが、環境体験学習に適した場所が全くない。先生と共に悩み、校区外のため池や都市公園も考えてみたが、納得のいくプログラムにならない。せめて、導入体験の五感遊びだけでも、学校内でやりたいと思い、校庭に出た。すると、校庭の端にクスノキ、ウバメガシ、アラカシ、サクラ、ヤナギ、イチヨウ・・・と様々な種類の樹木が茂る小さな森を見つけた。「学校の中に森があった！」産みの苦しみを共に味わった担当教員と顔を見合わせ、最高の笑顔で「やったあ。感動ですね。」と喜びを分かち合った。そして、「学校の木を観察して学校樹木図鑑を作ろう。」「名札をつけて他の学年の子どもたちにも教えてあげたい。」等、先生の方から積極的にアイデアが出てくるようになった。

### 3.4 D小学校（施設連携）の事例

「野鳥をテーマにしたプログラムの中で、公共施設を見学したいがどうすればよいか？」と相

談があった。

公共施設の特性を生かすことを考え、野鳥の研究者や日本野鳥の会レンジャーを訪ねることを提案した。子どもたちが野鳥を大切に思う大人の存在を知り、その仕事を体験することで、環境学習からキャリア教育的な展開へと新たな広がり期待できるよい機会ではないかと考えた。各施設に、このような趣旨を説明すると、快く受け入れに応じてくれた。さらに、「継続性のある学習の一端を担うという認識を初めて持った。とてもよいことだ。楽しみにしている。」「今まで、学校に合わせたプログラムを提供するという意識がなかった。頑張ってみよう。」との嬉しい反応があった。

#### 4. 環境体験学習サポートの成果と課題

これらの活動において、何よりも大きな成果は、担当教員が身近な自然の存在に気づき、その大切さを理解してくれるようになったことである。また、プログラム、ワークシート、スタッフ等、学校ごとに異なる取り組みをしているため、プログラム作成に悩むことも多い。そのような時は、フィールドに出て自然の中に身を置き感性を研ぎすませることで多くの問題が解決され、それ以上の成果を与えてくれることもある。そして、その感動を共有して味わうことで、教員の意識が変わる。そのことは、「楽しい」「子どもたちに教えてやりたい」という言葉に現れてくる。こうした自然を仲立ちとした信頼関係の構築によって、その後の活動がスムーズに進んでいくのを実感している。

さらに、3.4の事例にあげた2つの公共施設においても学校と公共施設の間にコーディネーターが入ることで、継続性のある体験学習が可能になった。

このような環境体験学習のサポートを継続していくことで、教員が楽しんで取り組み、その思いは子どもたちに伝わる。つまり、教員が変われば教育が変わる、子どもが変わる、親が変わる。そうすれば、社会も変わっていくはずである。こうして、環境体験学習において小さなイノベーションを積み重ねていくことが、やがては、人と自然が共生する社会を実現する有効な手段になるのではないかとその思いを強くしている。今後も新たな事例を重ね、この思いをさらに発展させていきたい。

#### 参考文献

明石市教育委員会『環境体験事業』明石市教育委員会、2008年。

#### 参考ウェブサイト：(2009年9月30日閲覧)

明石市教育委員会

[http://www.edi.akashi.hyogo.jp/kyoiku/gakkou\\_kyouiku/taiken.php](http://www.edi.akashi.hyogo.jp/kyoiku/gakkou_kyouiku/taiken.php)

ひょうご環境学校事業プログラム

<http://www.pref.hyogo.jp/JPN/apr/kisha/17kisha/h18m3/0324puroguramu.pdf>

兵庫県環境学習環境教育基本方針

<http://www.pref.hyogo.jp/JPN/apr/kisha/17kisha/h18m3/0324housin.pdf>